

第四百二十二回 青葉会 句会報

令和三年六月二十四日(木)

午後一時半〜五時 於：パレスサイドビル 赤坂飯店

選者 川口孤舟

出席者 今井紀久男 川口孤舟 久米五郎太 在間千恵 佐藤ただしげ 長谷見びん

投句・選句 伊賀山そらお 柿崎忠彦 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか 中川雅夫

古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 安部眞希子 重枝孝岳 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 福島正明

《互選句》○は選者の特選 ◎は孤舟選者の選

十点 ◎かたつむり一所不住の旅の跡 びん (そ・紀・忠・孤・健・恵・○敏・雅・啓・亜)

八点 現世(うつしよ)と来世の間(あはひ) 蛇の衣 孤舟 (紀・○五・恵・孝・堂・○啓・亜・け)

想い出の鮎の宿朽ち風走る けいこ (紀・孝・敏・ゆ・雅・び・正・亜)

◎籐寝椅子遠き昭和の夢を見る 盛雄 (紀・そ・孤・孝・龍・○た・ゆ・允)

舟底に膨れて鳴くや河豚の夏 びん (そ・紀・五・恵・た・啓・亜・け)

七点 ◎風鈴や閑居の午後の子守歌 健介 (○そ・孤・龍・敏・隆・昇・○盛)

六点 ◎喪の家に離れがたきや揚羽舞ふ 紀久男 (○健・孤・堂・隆・啓・盛)

◎竿灯もねぶたも止めて五輪やる 忠彦 (紀・孤・千・正・昇・規)

◎夏服で急にすっかり一年生 けいこ (眞・孤・○孝・隆・天)

五点 紫陽花の揺れて雨待つ風情かな 恵洲 (忠・た・ゆ・雅・規)

◎半夏生扉小開くる小料理屋 五郎太 (健・孤・龍・堂・亜)

◎青梅落つ月命日の母の墓 千恵 (紀・孤・堂・隆・規)

アルバムの母の笑顔や土用干し 堂哉 (紀・眞・千・隆・昇)

四点 薔薇垣のパン屋に並ぶ巴里の朝 紀久男 (允・健・正・盛)

山伏の法螺貝高し雲の峰 孤舟 (た・敏・○堂・正)

曲つても曲らなくとも胡瓜たり 全 (眞・忠・恵・び)

紫陽花や変わらぬままに歳をとり 忠彦 (五・孝・雅・け)

老鶯や謡に競ひ暫し鳴く 五郎太 (紀・千・敏・雅)

校庭に紅きカンナの猛々し 啓子 (紀・龍・規・天)

琉金や揺れる尾ひれのコケトリー 亜也 (紀・び・啓・盛)

接種了へ伸びし歩巾や夏帽子 盛雄 (○紀・五・ゆ・啓)

◎菩提寺の僧ひとりもの明易し 全 (眞・孤・び・天)

◎万葉の衣裳を今へ揚羽蝶 全 (忠・○孤・五・け)

三点

脇役の人間国宝片岡秀太郎を悼む

はんなりした女形弟子を育てて逝く五月
山椒魚徹頭徹尾山椒魚
青梅を大瓶に入れ時を潰づ
ワクチンに縋る思ひや梅雨ふかむ
夏空や少年の日の甦り

紀久男 (忠・た・雅)
孤舟 (恵・〇允・昇)
五郎太 (〇千・堂・け)
びん (そ・充・正)
ゆたか (紀・五・允)

二点

梅雨晴や町内駆ける救急車
梅雨曇りコロナ対策迷走す
ごきぶりに羽化登仙の願ひあり
孫が来て庭木伐採青葉風
梅雨入りにおニュー長靴いつ履こう
どくだみや楚々と集ひて花畑
水を浴び倦まず首振る釣忍

そらお (紀・健)
全 (紀・孝)
孤舟 (昇・〇垂)
ゆたか (紀・天)
千恵 (眞・隆)
全 (紀・規)
堂哉 (ゆ・け)

◎朝刊のバイクの去りぬ明易し

船十里瀬戸の飛鳥(ひしま)の枇杷は黄に
葉に止まり充電のごと蛍の火
立葵刻の速さを告げて咲く
梅雨の月薄き世見るやや欠けて
浮世絵や蚊帳の中なる美女三人(みたり)
父の日や嫁ぎし子のこと思ひ出す
手に負へぬ程に散り敷く繭(もち)の花

びん (恵・〇ゆ)
全 (孤・び)
昇 (健・規)
啓子 (紀・正)
雅夫 (紀・孝)
規雄 (紀・〇龍)
垂也 (忠・紀)
天牛 (紀・た)

一点

ガザ救え！和平祈念のレース編む
どさくさに原発再稼働す梅雨曇り
世界一へ翔(と)ぶ若人ら夏の蝶
熱く辛き料理に挑み暑に抗す
更衣ワクチン打って身も軽く
夏至の日のひび入る雲の奥に青
女学生冷菓手に持つ中華街
突然の雷雨で告げる梅雨の入り
りゅうぐうの砂の分析梅雨の星
早苗とる姿無くなり苗の床
巣籠や馳走は鯛のあらと汁
夏至の日をキリンの日ともなあるほど
沙羅桔梗白紫相和し庭唄う
夕風や老いの漁師の獲る肴
白南風や小瓶に詰めし星の砂
ががんばの傍若無人眠り覚む
敵めしき雷に周章てて蚊帳を吊る
紫陽花やまずシーボルトの名が浮かぶ

紀久男 (〇眞)
全 (敏)
健介 (紀)
恵洲 (紀)
忠彦 (千)
五郎太 (紀)
全 (び)
ただしげ (そ)
全 (千)
全 (龍)
ゆたか (紀)
千恵 (紀)
雅夫 (敏)
びん (天)
昇 (盛)
全 (盛)
規雄 (〇天)
天牛 (〇昇)

【句評】

十点句

かたつむり一所不在の旅の跡

びん

孤舟さん・蝸牛は長時間かけてゆつくり進み、進んだ跡が線となる。殻の家ごと移住しているのである。

惠洲さん・蝸牛の這った跡を、一所不在の旅の跡、と捉えたある意味大仰さが面白い。
敏郎さん・人生論的深い味わいあり。

雅夫さん・先日庭でかたつむりの歩くを見て三十分ゆつくりと動くのを眺めていると、なんとなく人生を思っていました。

紀久男・6月NHK TVで日本刀の白刃の上を渡るのを見て驚きました。「でんでん虫」の愛称がいとおしく感じられました。

九点句

現世(うつしよ)と来世の間(あわひ)蛇の衣 孤舟

惠洲さん・蛇の抜け殻を見て、このように感じられる感受性を買いたい。

五郎太さん・作者がよくご覧になるとい蛇の抜け殻は、セミよりもっと柔らかいものだそうです。漢字が多数つながっていますが、うつしよ、あはひ、きぬ、と読み、音に出すと、幽かで柔らかな世界が現れます。

八点句

想い出の鮎の宿朽ち風走る

けいこ

びんさん・淡麗な鮎の風姿に相応しい佳句ですね。でも、「想ひ出の」と言う懐旧の過去の風景になってしまう。季語の「鮎の宿」を現風景のものとして活かすには、「再訪の」ではどうでしょう。

籐寝椅子遠き昭和の夢を見る

盛雄

孤舟さん・涼風を浴び籐寝椅子に身を横たえれば、遠き日の諸々が臉に浮かぶ。

ただしげさん・籐の寝椅子でうとうとしながら、遠くなった昭和を思い出す様子が見て取れる。

舟底に膨れて鳴くや河豚の夏

びん

惠洲さん・膨れて鳴く河豚がユーモラス。夏の河豚でなく、河豚の夏としたところがユニーク。

ただしげさん・船釣りで小さい河豚が針にかかり、針が外れて船底で腹を膨らませ鳴いている情景を上手く詠んでいる。

七点句

風鈴や閑居の午後の子守歌

健介

孤舟さん・コロナ禍で身を持って余している祖父が、嫁の外出に際し幼い孫を託された。先程まで愚図っていた孫も、風鈴の音を子守歌としておとなしく寝てくれた。

隆さん・風鈴の音が暑さを払う理想郷。

六点句

喪の家に離れがたきや揚羽舞ふ

紀久男

孤舟さん・この揚羽は、「千の風」になった亡くなった方の化身なのであろう。

隆さん・小動物に命を見る優しさ。

竿灯もねぶたも止めて五輪やる 忠彦

孤舟さん・オリンピック開催の正当性は？

夏服で急にすっかり一年生

けいこ

孤舟さん・四月にピカピカの一年生で入学したが、二か月後の更衣にあたり、随分お兄さんお姉さんになったものだ。

孝さん……衣替えをしたお蔭で新鮮な気分になった一年生の気持ちが良い表現されています。隆さん……児の成長は速い。「夏服にはや大人びて一年生」ではいかがでしょうか。

五点句

半夏生扉小開くる小料理屋

五郎太

孤舟さん……コロナ禍の昨今、大っぴらの営業を躊躇う小料理屋。

堂哉さん……今、懸命に頑張っている店を応援したいですね。

青梅落つ月命日の母の墓

千恵

孤舟さん……母は毎年梅漬けを作っていた。今年は私が作って、月命日の墓前に供えよう。

紫陽花の揺れて雨待つ風情かな

恵洲

忠彦さん……シンプルな表現に紫陽花の情景が見られます。

ただしげさん……紫陽花の咲いている様子がなんとなく可憐で美しい。

アルバムの母の笑顔や土干し

堂哉

隆さん……時の流れは誰も止められない。

四点句

紫陽花や変わらぬままに歳をとり

忠彦

五郎太さん……いくつかあった紫陽花の句からこれをいただきました。七変化する紫陽花は毎年この時期に目を楽しませてくれる。それを眺める自分も毎年をとっていくが、それに合わせて変ったり、成長成熟してきていない気がする。本当は変わっているのでしょうが。

山伏の法螺貝高し雲の峰

孤舟

堂哉さん……山伏の一行が山頂付近を黙々と行く景色が目には浮かびます。季語が効いています。

曲つても曲らなくとも胡瓜たり

孤舟

恵洲さん……違えねえ！という句。目の付け所がいいし、こんな句材でも句になると、改めて思わせる。

接種了へ伸びし歩巾や夏帽子

盛雄

五郎太さん……みんなの大きな関心事。今日は大手町で地下鉄を降り、丸紅新ビルを眺めて来ました。あちこちに大規模接種会場の案内をする人が立っていました。私はまだ一回ですが、強い日差しの中を夏帽子を被って接種に行きました。

ゆたかさん……「伸びし歩巾」という措辞に作者の弾む気持ち伝わります。

紀久男……中七の表現と下五の季語が効いています。

菩提寺の僧ひとりもの明易し

盛雄

孤舟さん……大黒が亡くなり寺の運営にでんやわんやのお坊さん。まんじりともしない夜が続く。

万葉の衣裳を今へ揚羽蝶

盛雄

孤舟さん……揚羽蝶を見ていると、万葉時代の雅で落ち着いた女人の衣裳が思われる。

五郎太さん……古代の色使い、模様や団扇を持った女性の姿に揚羽蝶を重ねました。『万葉日

本画の世界』をとり出して、眺めています。

堂哉さん……発想に脱帽

三点句

山椒魚徹頭徹尾山椒魚

孤舟

惠洲さん・・これも「違えねえ！」だが、山椒魚の面構えや佇まいを思い浮かべると、山椒魚だから面白いという説得力がある。

允章さん・・全部漢字で山椒魚の生態を表現している。リズムも良い。

青梅を大瓶に入れ時を潰づ

五郎太

堂哉さん・・我が家でも梅酒を楽しんでいます。下五に参りました。

二点句

ごきぶりに羽化登仙の願ひあり

孤舟

亜也さん・・バカバカしさの中の俳味。

梅雨入りにおニュー長靴いつ履こう

千恵

隆さん・・梅雨が楽しみに変わるとき。

朝刊のバイクの去りぬ明易し

堂哉

孤舟さん・・毎朝バイクの音で目が覚める。まだ四時前だ。

船十里瀬戸の飛鳥(ひしま)の枇杷は黄に びん

惠洲さん・・黄色に実った枇杷の実を求めての船の旅、その甲斐あつた飲び。動きが感じられる。

ゆたかささん・・句に流れるようなりズムがあり、下五の色彩も鮮やかです。

浮世絵や蚊帳の中なる美女三人(みたり) 規雄

龍平さん・・美女三人とは・・当時のヨーロッパではどんな評価だった？知りたいですね。

一点句

ガザ救え！和平祈念のレース編む

紀久男

眞希子さん・・「！」入りの句に驚きつつも作者の強い思いに打たれました。

敵めしき雷に周章でて蚊帳を吊る

規雄

天牛さん・・こんな面白い句を詠む人は誰ですか。諧謔があつていいですね。青葉会のレベルが上がりましたね。

紫陽花やまずシーボルトの名が浮かぶ

天牛

昇さん・・紫陽花の別名はシーボルトが命名したオタクサ。日本妻の「お滝さん」に由来しているとか。彼と紫陽花にそんな縁があるとは良い話ですね。



次回青葉会

七月二十九日(木) 午後一時半～四時半

場所 丸紅ビル(四階) 会議室フロア 部屋番号 04A05:青葉会にて予約

※当日の入り方等について、改めて句会の前を確認してご連絡致します。

当季雑詠5句 投句は3句までで締め切りは七月二十七日(水) 中とします。今井宛 FAX か手紙、星田宛メール (keiko-reve@c07.itscom.net) いずれにでもお送りください。

※本来は二十二日(木)なのですが、東京五輪開催で会社休日の為一週間延ばしました。年会費を徴収します。会費: 壱万円 (名古屋以西は五千元)



一、「丸紅の皆様 お帰りなさいー」のポスターを玄関に貼った赤坂飯店パレスサイド店に、びんさん等6名出席。啓子さん(当日同居されている母上が体調崩した為)ら14名の投句、建替えた新ビルは一階の受付の所で中には入れず見物できず残念でした。句会場では個室の円卓で好みのランチとビール、紹興酒を賞味し乍ら開会。披露は五郎太さんで、ご覧のように出席者では孤舟さん、びんさん、投句のけい子さん、盛雄さん、健介さんが好成績でした。

二、関係者近詠

介護士の耳にピアスの穴ぬくと	眞希子	舌嘗めずりの猫を疑ふ桜鯛	陽亮
カカオ濃きチョコを気付けに春の雨	全	苗木植う身ほとりに蝶あそばせて	全
古稀を機に俳句入門緑立つ	全	春宵一刻妻が元気であてこそ	全
老桜の太根英國大使館	弘子	小兵力士の炎鵬・宇良	
迎賓館赤坂離宮 二句		春場所や業師繰り出す奇手妙手	紀久男
グリフォンへ止まぬ噴水春の庭	全	春一番友の新著に祝杯を	全
庭園でアフタヌーンティー燕来る	全	菊之助初役の武智光秀	
古稀を吹くからすのゑんどう莢の笛	全	春嵐義父の型継ぎ大当り	全
花あけび深川めしを待つ床几	全		

「森の座」(横澤放川選) 7月号

万緑や吾に付添ふ歩数計	盛雄	荒梅雨や通天閣の人出減り	紀久男
残る日の可処分時間桜桃忌	全	短夜やガザの和平を祈りをり	全
夏至の日の首長美人アガパンサス	全	無人にてトラクター駆る麦の秋	全
短夜や今日は笑顔の日と決めて	健介		
短夜や独りで生きる人強し	全		
友病むは他人事ならず戻り梅雨	全		

「きさらぎ句会」六月

佐倉麦秋掌ほどの富士泛ぶ	允章		
緑陰にコロナのマスク外しけり	全		
若き日の一途な想ひ辰雄の忌	全		

三、五郎太さんの新著「学びを旅する」(2月22日 西田書店 ¥1,800円)は簡潔で読み応えのあるお勧めの一冊です。

ちりばめられた俳句を列挙してみました。

丘見上げスイカで始む旅の朝	秋の出羽ばせふと共に巡りけり
藍と青行き会う夏のエーゲ海	秋の日や丸き字で綴る人の情
蟬時雨ミノスの王の時もまた	新米の湯気立ち上り出羽想ふ
皇帝の影は大きくミデイの夏	孔雀舞ふ盆提灯朝の影
夕焼けの機内に低く祈りあり	長法話ときどきとまる団扇風
サラセンの翼をおりて今日の秋	亡きひともいつか加わる盆の月

みかの原宮殿跡に春の風
時巡り柳の芽吹く南都かな
春うらら倭館で焼きし高麗(こま)茶碗
馬酔木咲く小雨の中の池掃除
朝日射す大額見上ぐ梅の苑 (北野天満宮 絵馬堂)
初桜歩みゆるめる昼下がりに

四、孤舟選者主宰の「爽樹」7月号より掲載句

春寒しナースコールの鳴り止まず
あっぱれな碧空を曳くいかのぼり
かぎろひの草原を発つ熱気球
逃水を追い逃水に囚はるる
臙より臙へ通ふ猫の道

五、黛まどかが日経夕刊のコラム「あすへの話題」に週一回連載しておりました。

その中で TICAD (アフリカ開発会議) 出席で来日したチュニジアのマルズーキ大統領が好む一茶の句
「かたつぶりそろそろ登れ富士の山」を紹介していました。
まどか作品から小生好みの夏の句を抄出してみました。
相聞の涼しく一句返さるる(パリで句友と) 紫陽花に佇んで胸濡らしけり
戦争をおもしろさうに泥鰌鍋(隣の卓で戦友会) 大願をかけて藪蚊に刺されけり
それぞれに一病を負ひ明易し 涼しげな目をしてるたり負け力士

六、村田くに子さんが退会されました。

昭和30年代、丸紅俳句部の全盛時から始められ、昭和38年の再建・新発足の青葉会の創立メンバーでもあられた邦子さんは 星野立子主宰「玉藻」に会員として永年続けて来られましたがお仲間も減り選句だけやって頂いておりましたが、ご高齢を理由に退会申し出あり、お受けすることにしました。永い間ご苦勞様でした。感謝申し上げます。次第です。
青葉会での小生好みの句を抄出してみました。

新樹影重なり深き淵となり
口ずさむ亡き師の一句花おぼろ
夏霧に湖舟のまるるごとく消ゆ
過疎すすむ村のはずれの桐の花
伊那谷の夜は漆黒蛙鳴く
羅に剃り跡青き尼僧来る
地図を手に足早に行く盆の僧
切々とおわらの調べ風の盆
蛇いちご真紅の毒を雨に吐し
水面ゆれ画布に青葉の影もゆれ

以上 文責 紀久男

令和三年七月八日

紀久男

記